

山田先生の発表

司会： 山田先生、よろしくお願いします。

山田： 「先生」って呼ばれるのははずかしいんですが、教員の生活長かったんで、それしか呼びようがないのかもしれませんが。まあ、あまりまとめにはならないんですけど、わたし自身感じたことや個人的なことなどをちょっとお話したいと思います。

まず、「多文化」というのが、家庭の中でも大事だし、地域社会の中でも大事なんじゃないかというふうに考えました。こう気づいたことについてこれまでの経験との関連からお話したいと思います。でわたし自身のことを言うと、2017年に、リタイアをして、現在定職はないんです。

それまでは15年ほど法政大学キャリアデザイン学部というところの専任をしてたんですけど、それを定年で辞めて、今は不定期の頼まれ仕事や執筆活動などを行っています。これまで専門にしてきたのが、日本語教育と多文化教育というものなんです。

「多文化教育」というのは聞き慣れないという人もいらっしゃると思います。いろいろな文化を持った人たちが、一緒に暮らして行く中で、自分も含めて多様な文化を尊重して、それで、その多様な文化を持つて人たちが一緒に生活して、その多様性を大切にできる社会を作っていく主体になれるような意識とか能力とかを付けていくための教育なんですけれども。

これを、生まれて物心が付く前から絵本の読み聞かせなども含めて家庭教育でも、入学前教育から大学教育までの学校教育でも、その後も社会教育なんかも含めて、生涯学習として行うという教育ジャンルがあるわけです。それが、今、日本社会においても国際社会においてもとても大切になっているんじゃないかと思います。というふうに思っています。その「多文化教育」を日本語教育とともに専門としている人間です。

それで、法政大学の前に、大阪大学で1993年から2003年まで10年間、働いていました。その時に、山野上さんから発表がありましたけれども、とよなか国際交流協会の「子どもメイト」という外国につながる子どもたちの放課後の居場所作りのボランティアをしていました。

大阪大学は生業としての仕事なんですけれども、そのうちここでボランティアをしていたのは1996年から2003年までの7年ほどです。

その前は、東京の女子大、その前は文化庁職員。そしてその前が、埼玉県所沢にあったんですけども、中国帰国者のセンターで、主に子どもたちにですね、日本語を教えることの担当をしていました。そんなのが自分の経歴です。

で、読み聞かせも含めて、多言語多文化というものを、子どもたちが自分の中にちゃんと位置づけられるようにサポートする社会、その大切さっていうのを、四つのテーマに分けましたけども、お話したいと思います。時間は25分いただいているんですけど、できれば早く終わって、お寄せいただいている声もありますので、そういう声の紹介に繋がれたらと思いますが、いつも時間ギリギリになってしまっ…。

スライド 2

- 1 図書館の多文化，多言語サービスの必要性に気づいた経験
かつてのよなか国流の「子どもメイト」で，
中国帰国者の中学生が利用していた図書館
- 2 韓国ソウルの多言語・多文化図書館と山田の家族の話
継承語，継承文化とアイデンティティ（「生」をつなぐということ）
- 3 子どもの知的発達と絵本や童話の読み聞かせについて
学習言語の習得（知的発達）との関係
- 4 多文化教育としての多言語読み聞かせ体験
中国帰国者センターの子どもクラスでの体験から

わたしの場合はビジュアルなスライドは作ってなくて文字だけですが、それをご覧いただきたいと思います。

1 番目が図書館の多文化・多言語サービスの必要性に気づいた経験ってということなんですけど、これはあのう、今も申しあげたよなか国際交流協会の子どもメイトという外国につながる子どもたちの放課後の居場所づくりのボランティアだったんですけど、その時に中国からの帰国者の子どもですけど、その中の一人が、中学一年になったときに気がついたんですが、ええと、火曜日と木曜日が居場所づくりの日で、そのうちわたしが担当してたのは火曜日なんですけど、その日は、仕事を早めに切り上げて行くと、その子が早く来てて本を読んでるんですね。で、読んでる本を見ると中国語の本を読んでました。それもちょっと分厚い本で。

あれ、こんな本読めるんだ、素晴らしいなあと思いながら、チラチラ見てたんですけど、そのうちちょっと話をしたら、それがあの中国拳法の小説で、少年少女向けだと思うんですけども、中高生向けの本だったんですね。それでその本の話をしてたら、いや、これもあの借りてきたんだって言ってビデオを見せてくれて、これだけ今日は借りてきたと言っていったんです。どこで借りたんだって言ったら、大阪市の中央図書館で、そういう外国の本とかビデオとかを置いてある所があって、そこで借りてるってということだったんです。面白そうだなと思って、私も行ってみました。それで、そこの司書の人に話を聞いたりしたんです。

なかなかしっかりしたポリシーをお持ちで、住民のための図書館ではできるだけ多くの人に利用してもらえるように外国の本をそろえているということを知って、素晴らしいなあと思いました。で、その子の方ですけども、前週から新しく参加した中国からの子どもが入ってきて、その子が…「いいなあ」って、その子が、中国語の本を読んでいるのを見て、「いいなあ」って言ったんですね。それでちょっと寂しそうに、「俺はもう（中国語の）本は読めない」って言ったんです。

中国語の本はその子が一人で読めるので、子どもメイトでは、日本語の勉強とか、日本語での教科の学習とか、そういうのを一緒にやってたんです。

この子に、「お前、中国語も日本語もできてすごいよ」って言ったら、その子がぽろっと、「い

や、俺の中国語なんて、子どもの中国語だよ。それしかできない」って言ったんです。そうか、この子は本を読んで、書き言葉の中国語を受容するってということで、自分が話たりなんかして、発信する方の中国語ってというのは、子どもの中国語しかできないってことが分かったんだと思います。

結局、その子は、頑張っで大学まで行くんですけども。それで自分で、中国の大学との交換留学に行っで、それで大人の中国語を身につけるんですね。で、その後は、今度はボランティアとして、日本生れの子たちとか、中国に繋がっている子たちの母語学習の支援を始めるんです。なるほど、支援されていた子どもが成長して今度は支援する側になるというってのはとても大事なことなんだなっでいうふうに思いました。

この体験が、最初に、母語というか継承語というか、日本語とともにその言葉も大切に育っでいくことの重要性っていうのに気付いたものでした。

それから2番目の韓国ソウルの話ですけど、これは2009年だったと思いますけど、韓国の移民の受け入れの調査で行った、ソウルのトンデモン（東大門）のボランティア団体だったんですが、ええと…？「青い市民連帯」ってところですが、そこに行っで大切なことを学びました。

この団体は、特にその…韓国人と結婚をして子育てをしている、「多文化家族」って韓国では言いますけども、そのお母さんたちの韓国語の勉強のための教室を開いていて…、そこを見学しに行っただんですけど、その主宰の人が、2軒ほど、いや3軒ほど隣のビルに、多文化図書館があるからぜひそっちも見っでっでくれっで。

で、自分たちがここでやっでることは、このお母さんたちに韓国語を身に付けてもらっでというものが最終的な目的ではない。このお母さんたちに自分を尊敬してもらえような、そういう活動をしたんだけっていうことだっでたんですね。

それを聞いてから、その図書館に行っでみたら、なかなかでした。そこには8つの言語の絵本や児童書とかを揃えてあっで、床には絨毯が引いてあっで、そこで子どもも床に座っで本を読んだりしていて、喫茶コーナーもあっで、お母さんたちが子どもが本を読んでいる傍で話しをしていたり、寛いでいました。母国が同じこと人たちだと思っでるんですけど、外国語で話をしてたりっでいう情景だったんです。

その中で、あともう一つすごいなと思っでたのは、それぞれのお母さんたちの国ごとに、その国の言語で絵本も作っでるっでているんです。それもすごいなあっで思いました。

それからもう一つ、玄関を入っですぐの壁に8枚の色紙が貼っであっで、その色紙の左側にです。8つの言語ごとそれぞれに、左側に、日本語のやつを見ると、「母語・母文化を子どもに伝えるのは親の義務です。私は母語・母文化を子どもに伝えます。」だったか、宣言が書かれてるんですね。で右側にその宣言に賛同しているお母さんのサインが書いてあっでたんです。そうか、なるほどな一と思っで、それでその図書館の方を見っでみると、その子どもに母語で読み聞かせをしているお母さんたちの顔つきが、いわゆるその、教室で韓国語を勉強しているお母さんたちの顔つきと違っで、明らかにその「お母さん」の顔つきになっでるっでいうのに気が付いて、それで主催者が言っでいた。「自分を尊敬してもらっでるのが目的だ」っでることが、なんとなく分かったんです。

それは私自身の家族も、兄の家族ですが、香港で二人の子どもが生まれ上の甥が小学生になっでたころアメリカに移住して子育てをしていました。子どもたちが二人とも小学生になっでてからは、長期休暇に日本のおばあちゃんの家で過ごすことが多っでたんですね。成長してからは、世界のい

ろんなところに行ったりしています。兄夫婦はアメリカに最後までいるんじゃないかなと思いますけど。

その子どもたちが、私からは甥と姪ですけども、私の母親、本人たちからいうと、「お婆ちゃん」とは、日本語でのやりとりしてきてですね、電話とか手紙とかでやり取りしてきて、兄の家庭でも日本語が家庭言語だったんです。それでずっとお婆ちゃん（私の母親）は、93で亡くなったんですけど、亡くなるまでずっとやり取りをしてくれていました。わたしの母親も姪からもらった「お婆ちゃん、元気で長生きしてください。」というカードを枕元に置いていました。亡くなるまで、電話でいろんなことがやり取りができて、両方にとってよかったと思います。それを見て、「生をつなぐ」ってこういうことなんだと思いました。

そうなんです。

つまり、外国から日本に来て、日本語を勉強している人たちは、日本語でいろいろなことをやらなきゃいけないんだから日本語の勉強頑張れよっていうだけじゃなくて、その人たちを「家族」っていうような形で考えると、自分の母国の家族たちとか、友達とか、いろんな繋がりがあって、自分がいるんだって、そして自分を大切なひととして繋がってくれている人もいると、それをちゃんと受け止めて、自分を尊敬できることが大事なんだなあっていうふうに思いました。

3番目ですけども、子どもの知的発達と絵本や童話の読み聞かせとの関係についていってるんですけど、これは、ご存知の方はご存知だと思います。子どもの「学習言語」の獲得と学力の伸長は密接不可分だということです。一つの言語でも、学習言語と生活言語っていうのがあって、使うシチュエーションによって、ちょっとした違いがあるんです。例えば、私たちは普通、物を買うときに「これ、いくらですか？」と言って、「これ、何円ですか？」とは言いませんよね。でも、小学校の算数という教科の学習では、「何円」を使うこともあるんですね。

それは例えば、2個あるいは3本とかっていう、数詞と助数詞との組み合わせがありますね。それで、小学校低学年の算数で、「1個 100 円の消しゴム 2個と 1本 80 円の鉛筆を 3本買いました。合わせて何円ですか。」という問題文があるんです。「1」とか「100」とか、「80」とか「3」とかは数詞ですね。「個」とか「円」とか「本」は助数詞ですね。「何円」の「何」は不定数を表す数詞と考え、数字の「100」とか「80」とかとの関係で、値段を問う文となるわけです。わたしは、この「何円」は、算数の加減乗除を論理的に行うためにある、典型的な学習言語の語彙だと思います。今、「学習」とか「言語」って言ったんですけど、これも、普通の生活言語では「勉強」とか「言葉」って言えばいい、学習言語の語彙ですね。語彙の例だけ示しましたが、文レベルや文と文を組み立てていくにも、学習言語と生活言語の違いがあるわけです。教科書や作文などの書き言葉の多くは学習言語ですけど、話し言葉でもニュースとか、今もそうですけど、講演の言葉とか一法的にまとまった話をするのは学習言語とってよいと思います。

つまり、学習言語を使いこなして、学習・思考を進めていくわけです。

で、学習言語は小学校に入って教科の学習を通じながら習得していくと言われるわけですけど、その習得には、生まれてから学校に入るまでに十分なレディネスを育てておく必要があって、そのためには絵本や童話の読み聞かせや昔話の語り聞かせが重要だということです。

わたくしが大阪にいたころに大阪のボランティアで外国につながる子どもたちに関わっている人とか、学校の先生とかが、学齢前の来日や日本生まれの子どもたちで、日本語はほぼ第一言語で日本語でのやりとりはパーフェクトなんだけれども、学力が伸びていかない子が多いって

うので問題になったことがありました。で、高校に進学するために受験するんですが、合格率が、中学校の2年、3年で日本に来て、まだ日本が不十分なまま受験という子たちと同じか、それよりも、低いぐらいの割合だっていうことが分かってきたんです。

その学力が伸びていかない子どもの多くは、日本語の学習言語の伸長もうまくいってないと、経験的にですが、感じるということです。さらにそのような子は、生まれてすぐからの絵本の読み聞かせとか、その後の童話の読み聞かせ、昔話の語り聞かせなどが十分なされていないことが多いのだということです。

そういう指摘を受けて、わたしは、幼少期に言語的な刺激によって、自分の頭の中に世界を描いていく、頭の中で登場人物（動物でもなんでもいいんですが、）が、感情を持って生き生きとやりとりしていく世界を描き、それを自分で味わうって経験を得る、その訓練をずっとやってきたかどうか、それがどうも、レディネスとして重要だというふうに、まあ仮説ですけども、思っていたわけです。

ですが、外国につながるかどうかとは関係なく、子どもの知的発達の実践者の多くは、子どもの知的発達と絵本とか童話とかの読み聞かせは関係が深いと言っていて、それはまあ、今では一般的になっているわけです。

まあ、そんなことがあるわけです。

それから最後ですけども、その4番目の多文化教育としての多言語での読み聞かせ体験が多文化共生への意識や姿勢の育成に重要だということで、これは、今日の皆さんの発表で言われていたことで、そのとうりなんですけども、ええ、つまり、その子どもたちが複数の言語に、小さい時から触れるってということによって、多文化能力、自分と違うものを受け入れる能力、そして自分もそういう違っている中の一つの存在として、アイデンティティーを確立していくことにプラスになっていく。そういうことは十分に考えられます。わたし自身はさっきも言った中国の帰国者センターの子どもクラスを担当していたときに、その子たちが、卒業の前に発表会で「大きなカブ」の劇をして、それが印象的だったんですけども。

ええ自分たちの言葉の発達っていうか、日本語がどうこうっていうよりも、まあ、音ですわね、「うんとこしょどっこいしょ」とかいう、大きなかぶをみんなで力を合わせて引っ張るときの掛け声ですね、それを声を合わせて、すごく気持ちよさそうに言っていました。そんなふうに日本語の音を楽しみ、自分のものにしていく。そういうのを感じました。つまり、分からない言語でも多言語でわからないなりに音を掴んで、意味は後からなんとなく分かってくるということなんだと思います。小さな子どもたちが母語でも第二言語でも言語を覚えていくのは。

それが絵本というような媒体を通じて、なんとなくこう、自分で受容していくっていうことが、多文化能力につながっていく。そういうことがあるんじゃないかと思います。まあ、仮説ですけども、そんなふうに思いました。

ええ、ちょっと、時間がオーバーしたでしょうか。これで終わりにします。ありがとうございました。

司会： 山田先生、ありがとうございました。